



知っていますか？

10月1日は「国際音楽の日」です



1977年にユネスコの要請で設立された国際音楽評議会という会議で、翌年の1978年から毎年10月1日を、世界の人々が音楽を通じてお互いに仲良くなり交流を深めていくために「国際音楽の日」とすることにしました。日本では、1994年から毎年10月1日を「国際音楽の日」と定めています。

能面と狂言面

このパンフレットでは、女性と鬼の能面をイラストで描いています。どちらも能を代表する能面で、女面は「小面」や「若女」という種類があります。もうひとつの鬼の能面は「般若」といい、頭に角が生えてしまうほど怒り、悲しんでいる女性の姿を表現しています。能は多くの場合は能面を使いますが、狂言は素顔のまま芝居をすることが多い芸能です。しかし、狂言もいくつかの演目では面を使い、こちらは狂言面と呼ばれます。狂言面は、たとえば同じ鬼でもどこか親しみやすさがあり、2つの芸能が描く世界観の違いはこんなところにもはっきりと現れているのです。

公益財団法人梅若会

〒164-0003 東京都中野区東中野2丁目6番14号
TEL. 03-3363-7748
FAX. 03-3363-7749
ホームページ https://umewaka.org/
メールアドレス umewakakai.piif@gmail.com



撮影：神田佳明

公益財団法人梅若会は1961(昭和36)年に設立された、能楽観世流の主要団体のひとつです。当主の四世梅若実(人間国宝・日本芸術院会員)は、現代の能楽界を代表する演者のひとりであり、古典はもとより、新作上演にも積極的に関わり、今日を生きる古典芸能としての能を支えています。梅若能楽学院会館(東京・中野区)を活動拠点に定期公演を開催する他、梅若能楽学院では後進の育成にも力を注いでいます。



令和3年度

文化芸術による 子供育成総合事業

一巡回公演事業

公益財団法人梅若会 能楽公演



本日のプログラム

- 1. お話
2. 狂言「柿山伏」
3. 休憩
4. 能「殺生石」

\*都合により順番が変更になることもございますのでご了承ください。

我が国の一流の文化芸術団体が、小学校・中学校等において公演し、子供たちが優れた舞台芸術を鑑賞する機会を得ることに より、子供たちの発想力やコミュニケーション能力の育成、将来の芸術家の育成や国民の芸術鑑賞能力の向上につなげることを目的としています。

事前のワークショップでは、子供たちに実演指導又は鑑賞指導を行います。また、実演では、できるだけ子供たちにも参加してもらいます。



撮影：吉越研

今日の演目について知ろう

能「殺生石」あらすじ

玄翁という僧(ワキ)が、那須野の原(現在の栃木県)を通りかかったとき、巨石に近づいた空飛ぶ鳥が落ちるのを見て不思議に思います。そこに一人の女(前シテ)が現れ、石は殺生石といい、近づくと命を奪われると教えます。その昔、玉藻前という女官がいて帝に寵愛されていました。しかし狐の化身であることが知れたことで討たれ、その怨念が石となったのです。女は自分こそがその玉藻前だといながら消えていきます。やがて、玄翁が祈りを捧げていると殺生石が2つに割れ、狐の霊(後シテ)が姿を見せます。そして、自らが討たれた様子(石)となり生き物を殺してきた過去を語ります。しかし、玄翁の力で今はその恨みも消え、狐の霊は静かに去っていくのでした。

狂言「柿山伏」あらすじ

山伏が修行を終えて帰る途中、空腹に負けてしまい、柿の木に登って勝手に柿を食べ始めます。するとそこに柿の木の持ち主が現れて、木の上にいる山伏を見つけます。持ち主は、盗み食いをする山伏をからかって、そこにいるのは「犬だ」「猿だ」「鳶だ」といって、それに応えて山伏もモノマネをしてその場を逃れようとします。終いには「そろそろ飛び立つ頃だ」といわれ、山伏は柿の木から飛び降りてしまいます。遂に顔を合わせた山伏と柿の木の持ち主のふたり。さて、最後はどのような展開になるのかというと……。



# 「なぜ」「どうして」を知る!

はじめまして

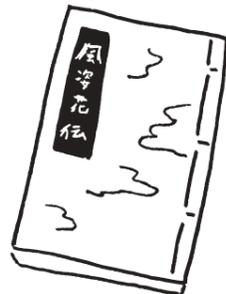
## 能と狂言

のう きょうげん

能と狂言は、どちらも古くから楽しまれてきた演劇です。いろいろな人が工夫をして、長い時間をかけて今のような奥の深い芸能になったのです。ここでは8つの話題から、そんな能と狂言の世界を少し学んでいきましょう。

### 4 ベストセラー『風姿花伝』

観阿弥・世阿弥親子は、能楽を学ぶときの最重要人物! そのふたりを知るのに欠かせないのが『風姿花伝』です。父・観阿弥の教えをもとに世阿弥が書き残した本で、日本で一番古い演劇論です。例えば、秘めることでモノの魅力が高まることを、世阿弥は「秘すれば花」という言葉で表現しました。今では日本文化を知る手掛かりとして、世界で読まれている名作なのです。



### 6 ほほ笑み、涙する能面

表情に変化のない人を指して「能面のような顔」ということがあります。それは大きな間違いです。能面をつけて、顔を少し上に向けたときを「テル」と呼び、明るい表情が現れます。反対に顔を少し下に向けたときを「クモル」と呼び、悲しい表情が現れます。いずれもその動きはわずかですが、実は物語の場面に合わせて能面はとても豊かな変化をみせているのです!



### 1 能ってなに!?

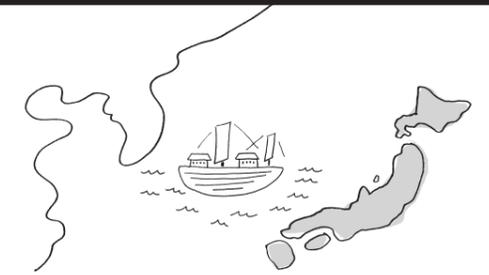


能と狂言、2つの芸能をまとめて「能楽」と呼びます。まずは能について、お話ししましょう。能は、仮面をつけて演じられる演劇です。神様がでてくるもの、鬼が出てくるものなど、たくさんの物語があり、その数は200種類以上もあります。笛・小鼓・大鼓・太鼓という楽器の演奏と、情景描写や登場人物の気持ちを独特のリズムをつけて謡い上げる地謡というひとものがついて進んでいきます。主役をシテ、その相手役をワキといいます。

### 2 狂言ってなに!?

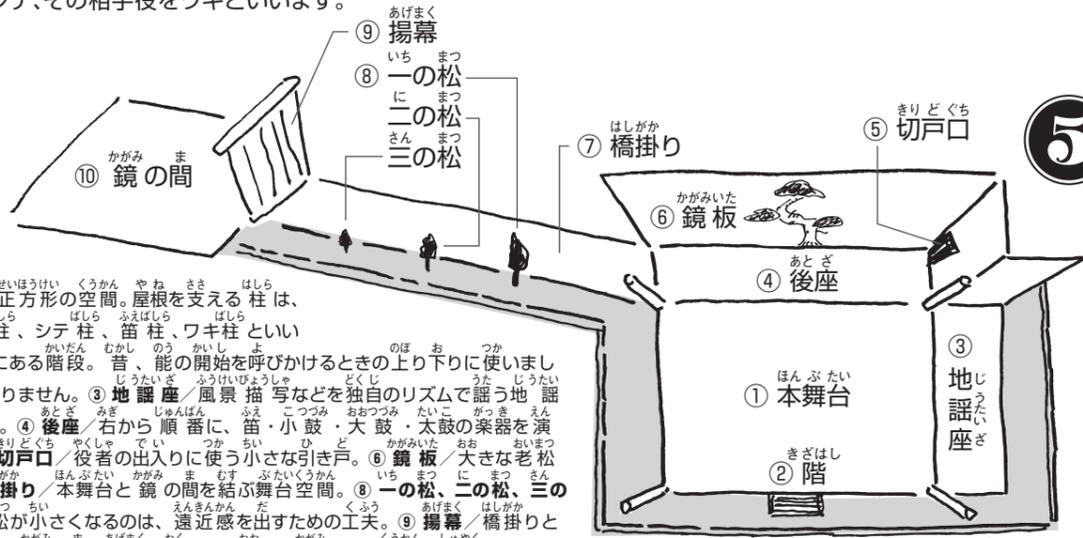


次は、狂言のお話しをしましょう。狂言は、笑いを中心とした演劇です。主人公には、少しばかりイタズラをしてしまうお調子者や、嘘がバレてしまいたい目玉を食らう間抜け者がたくさんいます。能には歴史上の人物が登場することもありますが、狂言は夫・妻・主人など、私たちの身近にもいる普通の人が主役になることが多い喜劇です。通常は2~3人で物語が進みます。



### 3 散楽→猿楽→能楽!

今から約700年前の室町時代、能は観阿弥と世阿弥という親子によって今のようなスタイルにまとめ上げられました。さらに古い時代には、猿楽と呼ばれていました。大陸から伝わったモノマネなどの芸能を散楽といい、それが訛ったというわけですが、江戸時代には「式楽」という公式の儀式で用いられる芸能として認められ、能と狂言の地位は確かなものになりました。



① 本舞台 / 一辺が約6mの正方形の空間。屋根を支える柱は、左下から時計回りに目付柱、シテ柱、笛柱、ワキ柱といえます。② 階 / 舞台中央にある階段。昔、能の開始を呼びかける時の上り下りに使いましたが、今は使われることはありません。③ 地謡座 / 風景描写などを独自のリズムで謡う地謡を担当する役者が座る空間。④ 後座 / 右から順番に、笛・小鼓・大鼓・太鼓の楽器を演奏する役者が並びます。⑤ 切戸口 / 役者の出入りに使う小さな引き戸。⑥ 鏡板 / 大きな老松が描かれた舞台背景。⑦ 橋掛り / 本舞台と鏡の間を結ぶ舞台空間。⑧ 一の松、二の松、三の松 / 本舞台から離れるほど松が小さくなるのは、遠近感を出すための工夫。⑨ 揚幕 / 橋掛りと鏡の間を仕切る五色の幕。⑩ 鏡の間 / 揚幕の奥にある大きな鏡のある空間。主役はここで能面をつけ、出番に備えます。

### 5 なぜがいっぱいの能舞台

その昔、能舞台は屋外に建っていました。今の能舞台に立派な屋根があるのはそのためです。周囲の4本の柱は屋根を支えると同時に、能面をつけた役者が舞台を動く時の目印にもなっています。舞台奥の松は年々枯れることのない植物で、どんな物語にも寄り添いやすい自然物として描かれています。そして、舞台左側の長い廊下を橋掛りと呼び、ここでの演技にも注目です!

### 7 足元にも注目しよう

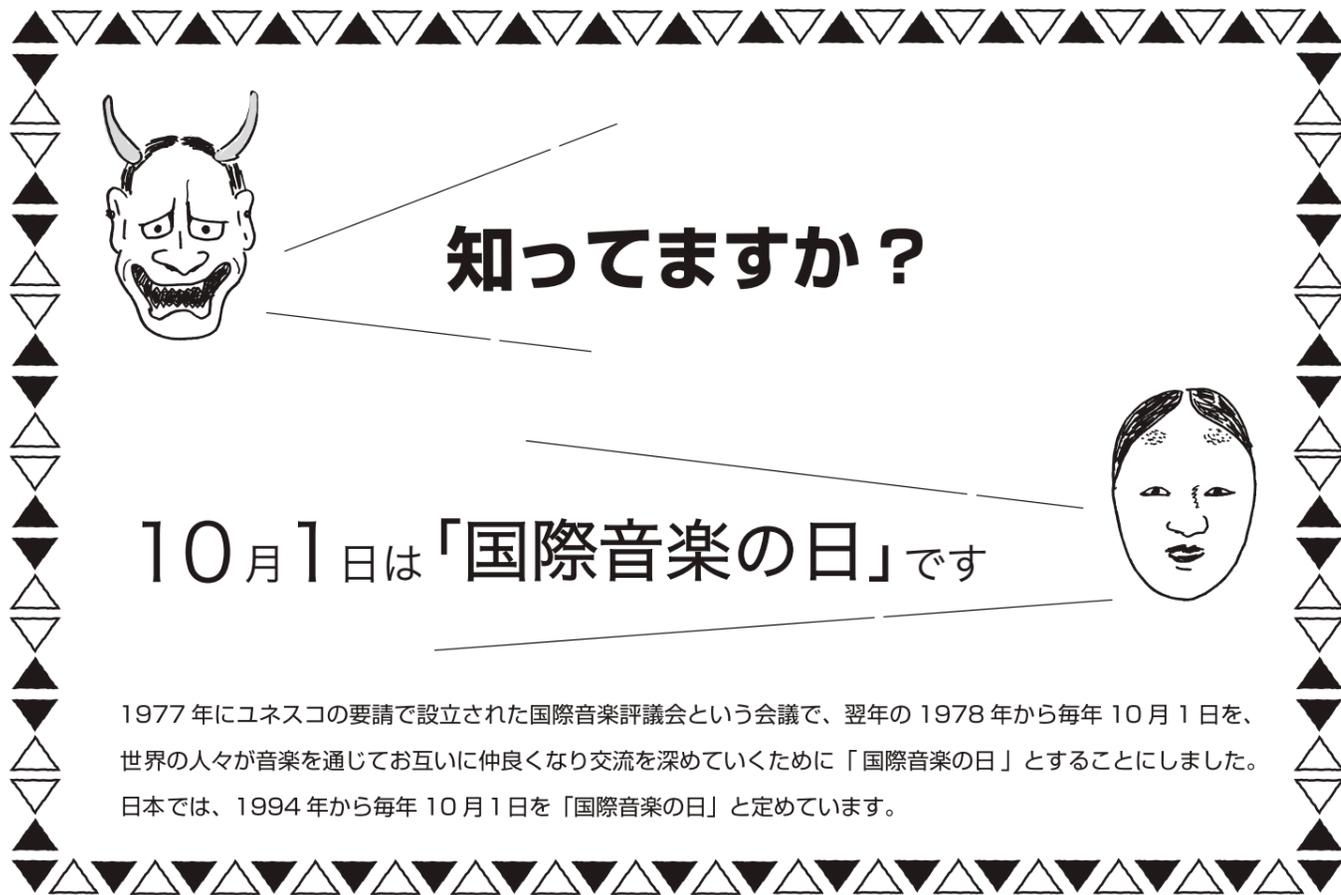
能楽の基本動作は、つま先をわずかに上げて踵は舞台から離さず、ゆったりと歩を進めます。重心は常に一定の水平運動が基本で、その動作に欠かせないのがすり足です。ゆっくり動いているからカラダも楽なのかといえば、そうではありません。それは、地上からは空をのんびり進むかのように見える飛行機が、実際はもの凄いエネルギーを使っているのと同じことなのです!



### 8 まとめ「能楽の楽しみ方」

能や狂言が演じられる舞台は、役者と少しばかりの小道具(作り物といえます)だけが並ぶ空間です。そして、美しいリズムをつけた言葉(謡いといえます)で物語を描きます。能楽を楽しむとき、大切なことのひとつが言葉をよく聞くことです。そして頭の中で、その場面を想像してください。そのとき、隣の人と同じイメージである必要はまったくありません! 能楽は、皆さんの想像力を信じて、役者と観客が一緒になって物語を進めていく日本独自の演劇なのです。





知っていますか？



10月1日は「国際音楽の日」です

1977年にユネスコの要請で設立された国際音楽評議会という会議で、翌年の1978年から毎年10月1日を、世界の人々が音楽を通じてお互いに仲良くなり交流を深めていくために「国際音楽の日」とすることにしました。日本では、1994年から毎年10月1日を「国際音楽の日」と定めています。

### 一 能面と狂言面 一

このパンフレットでは、女性と鬼の能面をイラストで描いています。どちらも能を代表する能面で、女面は「小面<sup>こおもて</sup>」や「若女<sup>わかおんな</sup>」という種類があります。もうひとつの鬼の能面は「般若<sup>はんにや</sup>」といい、頭に角が生えてしまうほど怒り、悲しんでいる女性の姿を表現しています。能は多くの場合は能面を使いますが、狂言は素顔のまま芝居をすることが多い芸能です。しかし、狂言もいくつかの演目では面を使い、こちらは狂言面と呼ばれます。狂言面は、たとえば同じ鬼でもどこか親しみやすさがあり、2つの芸能が描く世界観の違いはこんなところにもはっきりと現れているのです。

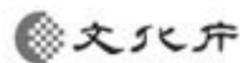
### 公益財団法人梅若会

〒164-0003 東京都中野区東中野2丁目6番14号  
TEL. 03-3363-7748  
FAX. 03-3363-7749  
ホームページ <https://umewaka.org/>  
メールアドレス [umewakakai.piif@gmail.com](mailto:umewakakai.piif@gmail.com)

公益財団法人梅若会は1961(昭和36)年に設立された、能楽観世流の主要団体のひとつです。当主の四世梅若実(人間国宝・日本芸術院会員)は、現代の能楽界を代表する演者のひとりであり、古典はもとより、新作上演にも積極的に取り組み、今日を生きる古典芸能としての能を支えています。梅若能楽学院会館(東京・中野区)を活動拠点に定期公演を開催する他、梅若能楽学院では後進の育成にも力を注いでいます。



撮影：神田佳明



令和3年度

## 文化芸術による 子供育成総合事業

一巡回公演事業一

公益財団法人梅若会 <sup>うめわかかい</sup> 能楽公演



### 本日のプログラム

1. お話
2. 狂言「柿山伏」<sup>かきやまぶし</sup>
3. 休憩
4. 能「殺生石」<sup>せつしょうせき</sup>

\*都合により順番が変更になることもございますのでご了承ください。

我が国の一流の文化芸術団体が、小学校・中学校等において公演し、子供たちが優れた舞台芸術を鑑賞する機会を得ることにより、子供たちの発想力やコミュニケーション能力の育成、将来の芸術家の育成や国民の芸術鑑賞能力の向上につなげることを目的としています。事前のワークショップでは、子供たちに実演指導又は鑑賞指導を行います。また、実演では、できるだけ子供たちにも参加してもらいます。



撮影：吉越研

### 今日の演目について知ろう

#### 能「殺生石」<sup>せつしょうせき</sup> あらすじ

玄翁<sup>げんのう</sup>という僧(ワキ)が、那須野<sup>なすの</sup>の原(現在の栃木県)を通りかかったとき、巨石に近づいた空飛ぶ鳥が落ちるのを見て不思議に思います。そこに一人の女(前シテ)が現れ、石は殺生石<sup>ころしせいし</sup>といい、近づくと命を奪われると教えます。その昔、玉藻前<sup>たまものまえ</sup>という女官がいて帝に寵愛<sup>ちやうあい</sup>されていました。しかし狐の化身であることが知れたことで討たれ、その怨念<sup>おんねん</sup>が石となったのです。女は自分こそがその玉藻前だといいつつ消えていきます。

やがて、玄翁が祈りを捧げていると殺生石が2つに割れ、狐の霊(後シテ)が姿を見せます。そして、自らが討たれた様子<sup>ようす</sup>と石となり生き物を殺してきた過去を語ります。しかし、玄翁の力では今その恨みも消え、狐の霊は静かに去っていくのでした。

#### 狂言「柿山伏」<sup>かきやまぶし</sup> あらすじ

山伏<sup>やまぶし</sup>が修行を終えて帰る途中、空腹に負けてしまい、柿の木に登って勝手に柿を食べ始めます。するとそこに柿の木の持ち主が現れて、木の上にいる山伏を見つけます。持ち主は、盗み食いをする山伏をからかって、そこにいるのは「犬だ」「猿だ」「鶯だ」といって、それに応えて山伏もモノマネをしてその場を逃れようとしています。終いには「そろそろ飛び立つ頃だ」といわれ、山伏は柿の木から飛び降りてしまいます。遂に顔を合わせた山伏と柿の木の持ち主のふたり。さて、最後はどのような展開になるのかというと……。



# 「なぜ」「どうして」を知る!

はじめまして

# 能と狂言

のう

きょうげん

能と狂言は、どちらも古くから楽しまれてきた演劇です。いろいろな人が工夫をして、長い時間をかけて今のような奥の深い芸能になったのです。ここでは8つの話題から、そんな能と狂言の世界を少し学んでいきましょう。

## 1 能ってなに!?



能と狂言、2つの芸能をまとめて「能楽」と呼びます。まずは能について、お話ししましょう。能は、仮面をつけて演じられる演劇です。神様がでてくるもの、鬼が出てくるものなど、たくさんの物語があり、その数は200種類以上もあります。笛・小鼓・大鼓・太鼓という楽器の演奏と、情景描写や登場人物の気持ちを独特のリズムをつけて謡い上げる地謡という人たちによって、物語が進んでいきます。主役をシテ、その相手役をワキといいます。

## 2 狂言ってなに!?



次は、狂言のお話しをしましょう。狂言は、笑いを中心とした演劇です。主人公には、少しばかりイタズラをしてしまうお調子者や、嘘がバレてしまい大目玉を食らう間抜け者がたくさんいます。能には歴史上の人物が登場することもあります。狂言は夫・妻・主人など、私たちの身近にもいる普通の人が主役になることが多い喜劇です。通常は2~3人で物語が進みます。

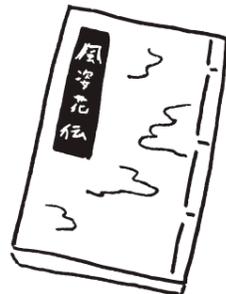


## 3 散楽 → 猿楽 → 能楽!

今から約700年前の室町時代、能は観阿弥と世阿弥という親子によって今のようなスタイルにまとめ上げられました。さらに古い時代には、猿楽と呼ばれていました。大陸から伝わったモノマネなどの芸能を散楽といい、それが訛ったというわけです。江戸時代には「式楽」という公式の儀式で用いられる芸能として認められ、能と狂言の地位は確かなものになりました。

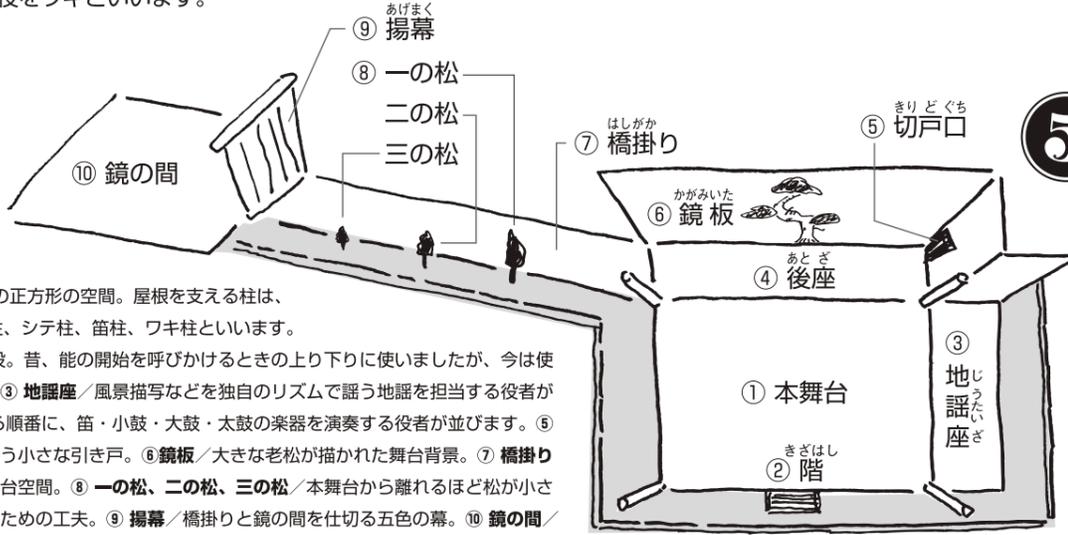
## 4 ベストセラー『風姿花伝』

観阿弥・世阿弥親子は、能楽を学ぶときの最重要人物! そのふたりを知るのに欠かせないのが『風姿花伝』です。父・観阿弥の教えをもとに世阿弥が書き残した本で、日本で一番古い演劇論です。例えば、秘めることでモノの魅力が高まることを、世阿弥は「秘すれば花」という言葉で表現しました。今では日本文化を知る手掛かりとして、世界で読まれている名作なのです。



## 6 ほほ笑み、涙する能面

表情に変化のない人を指して「能面のような顔」ということがあります。それは大きな間違いです。能面をつけて、顔を少し上に向けたときを「テル」と呼び、明るい表情が現れます。反対に顔を少し下に向けたときを「クモル」と呼び、悲しい表情が現れます。いずれもその動きはわずかですが、実は物語の場面に合わせて能面はとても豊かな変化をみせているのです!



① 本舞台 / 一辺が約6mの正方形の空間。屋根を支える柱は、左下から時計回りに目付柱、シテ柱、笛柱、ワキ柱といいます。  
② 階 / 舞台中央にある階段。昔、能の開始を呼びかけるときの上り下りに使いましたが、今は使われることはありません。  
③ 地謡座 / 風景描写などを独自のリズムで謡う地謡を担当する役者が座る空間。  
④ 後座 / 右から順番に、笛・小鼓・大鼓・太鼓の楽器を演奏する役者が並びます。  
⑤ 切戸口 / 役者の出入りに使う小さな引き戸。  
⑥ 鏡板 / 大きな老松が描かれた舞台背景。  
⑦ 橋掛り / 本舞台と鏡の間を結ぶ舞台空間。  
⑧ 一の松、二の松、三の松 / 本舞台から離れるほど松が小さくなるのは、遠近感を出すための工夫。  
⑨ 揚幕 / 橋掛りと鏡の間を仕切る五色の幕。  
⑩ 鏡の間 / 揚幕の奥にある大きな鏡のある空間。主役はここで能面をつけ、出番に備えます。

## 5 なぜがいっぱいの能舞台

その昔、能舞台は屋外に建っていました。今の能舞台に立派な屋根があるのはそのためです。周囲の4本の柱は屋根を支えると同時に、能面をつけた役者が舞台を動く時の目印にもなっています。舞台奥の松は年中枯れることのない植物で、どんな物語にも寄り添いやすい自然物として描かれています。そして、舞台左側の長い廊下を橋掛りと呼び、ここでの演技にも注目です!

## 7 足元にも注目しよう

能楽の基本動作は、つま先をわずかに上げて踵は舞台から離さず、ゆったりと歩みを進めます。重心は常に一定の水平運動が基本で、その動作に欠かせないのがすり足です。ゆっくり動いているからカラダも楽なのかといえば、そうではありません。それは、地上からは空をのんびり進むかのように見える飛行機が、実際はもの凄いいエネルギーを使っているのと同じことなのです!



## 8 まとめ「能楽の楽しみ方」

能や狂言が演じられる舞台は、役者と少しばかりの小道具(作り物といいます)だけが並ぶ空間です。そして、美しいリズムをつけた言葉(謡いといいます)で物語を描きます。能楽を楽しむとき、大切なことのひとつが言葉をよく聞くことです。そして頭の中で、その場面を想像してください。そのとき、隣の人と同じイメージである必要はまったくありません! 能楽は、皆さんの想像力を信じて、役者と観客が一緒になって物語を進めていく日本独自の演劇なのです。

